

# 平成30年度 学校経営経営計画に対する最終評価報告書

石川県立金沢錦丘高等学校

【重点目標1】 中高一貫教育の特長を生かし、高い進路目標に向かって自発的に取り組むことのできる生徒を育成する。					
具体的取組	主担当	達成度判断基準	備考	集計結果	分析（成果と課題）及び後期の対応
① 中学校との情報交換や指導記録も適切に踏まえ、学級担任や学年主任等による積極的な面談を行う。	各学年	「ホーム担任や教科担任との面談によって、自分の学習姿勢や進路選択に良い変化が生まれた」と思う生徒の割合が A 80%以上である B 70%以上である C 60%以上である D 60%未満である	生徒アンケート（7月・12月）により評価	生徒アンケート（12月） 「より良い変化が生まれた」73% （当てはまる26%+やや当てはまる47%）  【判定：B】	昨年同期と比べて1%の増、前期と比べて1%の減となった。本校では、担任との個人面談を重視しており、年に4～5回行っているが、効果については学年差があるようである。例えば、1年は前期比で11%の減、2年は6%の増、3年は2%の増であった。今後、特に1年時において、生徒のニーズを把握し、学習意欲を持たせられるよう面談の質を高めていく必要がある。
		「学年通信や進路だより・行事案内など学校からの情報を見ている」保護者の割合が A 80%以上である B 75%以上である C 70%以上である D 70%未満である	保護者アンケート（7月・12月）により評価	保護者アンケート（12月） 「学校からの情報を見ている」67% （当てはまる28%+やや当てはまる39%）  【判定：D】	肯定的評価の割合は、ここ数年「当てはまる」と「やや当てはまる」をあわせて70%程度であるが、昨年比では6%の減となった。学校からは学年通信を月毎に発行しているが、生徒で止まり、保護者元まで情報が届かないのが現状である。例えば保護者のニーズを把握した上、定期的に「進路便り」を発行するなど、年間活動の見直しを持っていただけるようしくみを変える必要がある。
② 学年通信や進路だより等を通して保護者に学校の様子を伝えるとともに、PTA活動や学校行事への参加拡大を図り、家庭との連携を強める。	総務課	P T A主催の行事に参加する保護者の数が、延べで A 1,000人以上である B 800人以上である C 600人以上である D 600人未満である	各行事の参加者数を集計し評価	P T A主催の行事に参加した保護者の延べ数は982人である。  【判定：B】	参加延べ数は、P T A総会、年2回の自転車マナー指導、年2回の進学講座、紫錦祭P T A模擬店、教育講演会に参加した保護者の合計数である。P T A役員等が各行事にアイデアを出して工夫していただいた結果、昨年度より30名程度多い参加者があり、本校教育活動に対する理解を深めてもらうことができたと考えている。
		「中高一貫教育校として、6年間を通じた指導方針や指導方法の共通理解と実践に、教科で取り組んでいる」と思う教員の割合が A 70%以上である B 60%以上である C 50%以上である D 50%未満である	職員アンケート（7月・12月）により評価	職員アンケート（12月） 「取り組んでいる」51% （当てはまる15%+やや当てはまる36%）  【判定：C】	肯定的評価は昨年比で14%減となった。中高接続に関する教科指導が一部の教員の取組に終わっている状況がみてとれる。本年度は、部活動や課題探究活動の中で、新たに中高連携を行ったが、各教科においても中高一貫教育校のメリットを生かす指導を今後考えていく。  * 2～3月に、理科及び社会科で中高連携の授業を実施。
③ 中高一貫教育校として6年間を見通した学習指導や進路指導を行う。	教務課	目標時間を達成している生徒の割合が A 80%以上である B 70%以上である C 60%以上である D 60%未満である	生徒アンケートにより評価	学年別学習時間調査（11月） 目標達成率 1年43.0%（前年47.7%） 2年47.7%（前年27.3%） 3年59.4%（前年66.5%）  【判定：D】  * 本年は11月分の抽出調査による	特に3年生の目標達成率が低迷した。いまだきの生徒は、宿題を与えて勉強せよと言っても簡単には聞かない傾向にある。なぜこの勉強が必要なのか、自分はどうかありたいのか、しっかりと自覚させ、学習への意欲を持たせる必要がある。  〈参考〉家庭学習の目標時間 平日 1年：2時間 2年：2時間30分 3年：3時間 休日 1年：4時間 2年：4時間 3年：8時間

④ いじめに関する校内研修やスマートフォン等のネットトラブルに関する講習会等を実施し、生徒のトラブルについて予防的対応を推進するとともに、問題行動の早期発見を図る。	生徒指導課	いじめ問題やネットトラブルの予防指導を「実践している」「ほぼ実践している」教員の割合が A 100%である B 90%以上である C 80%以上である D 80%未満である	【新規】 職員アンケート（7月・12月）により評価	職員アンケート（12月） 「取り組んでいる」75% （当てはまる22%+やや当てはまる53%） 【判定：D】	肯定的回答は前期比で8%増加した。担任や学年主任、保健室や相談室と協力し、トラブルの早期発見や対応の体制を作ってきた成果である。 7月からは「9時からNOスマホ」標語を生徒・保護者に呼びかけたり、後期からはスマホの不正使用に対して、学年独自の取組を行うなど、未然防止に努めた。 なお、この項目は本校が今年度新たに設定したものであり、目標値を高めに設定している。その目標値には届いていないことから、今後とも教員の理解を深め、全員で指導できる体制を整えたい。
⑤ 生徒一人一人が自発的に挨拶できるような雰囲気を醸成し、気持ちよく授業を受けられる環境を整える。	生徒会課	「学校生活において、挨拶を積極的に行っている」生徒の割合が A 80%以上である B 70%以上である C 60%以上である D 60%未満である  「校外からの来校者にも積極的に挨拶している」生徒の割合が A 70%以上である B 50%以上である C 30%以上である D 30%未満である	生徒アンケート（7月・12月）により評価	生徒アンケート（12月） 「挨拶を積極的に行っている」75% （校外からの来校者にも積極的に挨拶している30%+友人や教職員には自分から挨拶している45%） 【判定：B】  「校外からの来校者にも積極的に挨拶している」30% 【判定：C】	挨拶を積極的に行っている生徒の割合は昨年度（72%）よりも3%高くなった。しかし、「校外からの来校者にも積極的に挨拶している」という生徒はわずか30%である。来校者に対してしっかり挨拶できるよう、今後も、教員からの呼びかけを継続するとともに、生徒会や部活動を中心とした挨拶運動を展開していく。
⑥ 担任、学年、生徒指導室、保健室、相談室、部顧問が十分に情報を共有し、課題や悩みを抱えた生徒を早期に発見し、自発的解決に向けて協力する。	保健・相談課	「関係教職員の情報共有により、問題を抱えた生徒を早期に把握し対応している」と思う職員の割合が A 80%以上である B 70%以上である C 60%以上である D 60%未満である	職員アンケート（7月・12月）により評価	職員アンケート（12月） 「対応ができている」97% （よくできている22%+ほぼできている75%） 【判定：A】	肯定的評価の割合は昨年と同様97%であり、依然として高い。また、「よくできている」に関しては、昨年より4%上昇し22%となった。しかし、生徒個々の状況を把握し、職員間で共有する姿勢は広まっているものの、問題の解決に至っていないケースもある。今後とも、保護者や外部機関との連携も含め、協力体制を向上させていきたい。
⑦ 高校の各年齢段階で求められる知識・教養・感性を身に付け、文章の理解力・表現力を育成するために、読書を奨励する。特に、各教科と連携し、読書指導を授業やシラバスの他、あらゆる機会をとらえて行うことによって推進する。	図書課 各学年 各教科	「授業やシラバスの他、あらゆる機会をとらえて、生徒に適した書物を紹介し、読書量を増やすための指導をしている」教員の割合が A 50%以上である B 40%以上である C 30%以上である D 30%未満である	職員アンケート（7月・12月）により評価	職員アンケート（12月） 「生徒の読書量を増やすための指導をしている」37% （当てはまる5%+やや当てはまる32%） 【判定：C】  推薦図書の紹介冊数 平均1.5冊	前期と比べて大きな変化は見られない（昨年39%）。しかし、生徒に紹介する本の平均冊数は昨年（2.4冊）より大幅に減少した。生徒の学校図書館利用がより活性化するように、教員からの読書の働きかけを増やすだけでなく、生徒が組織する図書委員会の活動の活性化を通して、生徒への図書紹介の取組などを計画的・継続的に進め、生徒と読書を結び付ける環境を整えたい。

【重点目標2】各教科・科目における指導を通じて、生徒の、深い思考を伴ったコミュニケーション力の伸長を図る。

	主担当	達成度判断基準	備考	現 状	評 価 の 観 点
① ICTの効果的な活用やアクティブラーニングの手法を取り入れながら授業改善に取り組み、生徒に基礎的・基本的な事項を確実に習得させるとともに、論理的思考力や表現力の育成を図る。また、各教科の特質を踏まえた言語活動を通して、「コミュニケーション力」の育成を図る。	各教科	「他の教員の授業を参観したり、自分の授業を参観してもらった上で意見を伺ったりして参考になったと思える回数が、錦丘中との交流を含め、年間4回以上あった」と思う教員の割合が A 70%以上である B 60%以上である C 50%以上である D 50%未満である	職員アンケート(7月・12月)により評価	職員アンケート(12月) 「各学期に3回以上あった」56% 「各学期に2回あった」41% 計97% 【判定：A】	昨年同期と比べて19%のアップであった。「他の授業を見ることは合わせ鏡のように自分自身の授業を見る目になる」と言い続け、手軽に相互に授業を参観できる機会を多く設けたためであろう。 今後は、若手教員の育成研修を校内で行うことになることから、教員間の学びあうシステムを一層強固にしていきたい。
		「授業でICTをよく活用している」教員の割合が A 80%以上である B 70%以上である C 60%以上である D 60%未満である	職員アンケート(7月・12月)により評価	職員アンケート(12月) 「活用している」90% (月2回以上75%+月1回15%) 【判定：A】	前期と比べて10%増、昨年同期に比べて11%増であり、改善が見られている。本校が県教委のタブレット活用モデル校に選ばれたこともあり、ICTを使用する教員は確実に増えている。ただし教科や教員間で依然として格差があることから、教材や使用方法について情報共有を進めていきたい。
		「ICTを活用した授業により、学習効果が高まっている」と思う生徒の割合が A 80%以上である B 70%以上である C 60%以上である D 60%未満である	授業評価(7月・12月)により評価	生徒による授業評価(12月) 「高まっている」70% (当てはまる33%+やや当てはまる37%) 【判定：B】	前期と比べて8%増であった。A評価には届かなかったが、アンケート項目に入れてから4年間数値を伸ばし続けている。今後も単にICT機器の使用というだけではなく、タブレット端末等も効果的に活用し、学習効果を高められるよう、教員のスキルアップを図りたい。
		「授業の中に論理的思考力や表現力を伸ばす場面がある」と思う生徒の割合が A 90%以上である B 80%以上である C 70%以上である D 70%未満である	授業評価(7月・12月)により評価	生徒による授業評価(12月) 「思考力を伸ばす場面がある」81% (当てはまる39%+やや当てはまる42%) 【判定：B】	前期、昨年同期と比べ、ともに1%の増であった。肯定的評価の数値は低くはないが、各教科で求められる論理的思考力や表現力がどういふものかを共有し、それを育成するための授業デザインについて検討を続けていく必要がある。 今後の新大学入試に対応していくためにも、「深い学び」につながる授業を目指していく。
		「授業の中に話し合いや発表などを通してコミュニケーション力を伸ばす場面がある」と思う生徒の割合が A 90%以上である B 80%以上である C 70%以上である D 70%未満である	授業評価(7月・12月)により評価	生徒による授業評価(12月) 「自分の思いや考えを伝え合う場面がある」75% (当てはまる36%+やや当てはまる39%) 【判定：C】	前期、昨年同期と比べ、ともに2%の増であった。教科別(前期/後期)では、国語78/80%、地歴公民78/80%、数学72/77%、理科59/63%、外国語90/90%、保健体育65/65%であった。 コミュニケーション力は、本校でも重視すべきスキルであるとともにキャリア教育の点からも育みたい能力である。今後も言語活動を重視したアクティブラーニング型授業に学校全体で取り組んでいく。
② 教科や総合的な学習の時間の内容を関連させ、表現トレーニング、プレゼンテーション、多文化共生理解などに取り組むことで、論理的・批判的に事象をとらえ、自らの考えを述べる力を育成する。	教務課	「さまざまな世界的・社会的事象に対して、より関心を持つようになった」と思う生徒の割合が A 70%以上である B 60%以上である C 50%以上である D 50%未満である	生徒アンケート(7月・12月)により評価	生徒アンケート(12月) 「関心を持つようになった」61% (当てはまる15%+やや当てはまる46%) 【判定：B】	前期、昨年同期と比べ、ともに2%の増であった。今年度から1年と2年で本格的に始めた課題探究の学習効果があったものと考えられる。 今後も「社会との関わり」を扱う学習が求められることから、課題探究を一層充実させ、生徒の主体的な学習態度を醸成させていきたい。

<p>③ 難関大学や金沢大学を中心とした進路実現のため、1ランク上の志望を持たせることにより学習意欲の向上を図るとともに、入試分析や補講・添削等のサポート体制を強化する。</p> <p>※難関大 北海道大、東北大、東京大、名古屋大、京都大、大阪大、九州大、一橋大、東工大、神戸大</p>	<p>進路指導課</p> <p>東大・京大及び国公立医学科の現役合格者数が A 3名以上である B 2名である C 1名である D 0名である</p> <p>難関大及び金沢大の現役合格者数が A 70名以上である B 50名以上である C 30名以上である D 30名未満である</p>	<p>平成31年3月末の大学合格者数実績により評価</p>	<p>超難関・国公立医学科の合格者数 【判定：D】</p> <p>難関大および金沢大学の合格者数 【判定：C】</p>	<p>東大・京大・国公立医学科の現役合格者数は0名（昨年は2名）であった。</p> <p>上記以外の難関大現役合格者数は8名、金沢大学現役合格者数は23名であり、合計31名（前年は34名）であった。</p> <p>この数字に極端に一喜一憂する必要はないが、目安の数値として捉え、本校生徒の進路志望を一人でも多く達成できるように、教員のサポート体制を強化していきたい。</p>
	<p>今年度で学力を伸ばした1年生の生徒数が A 200名以上である B 180名以上である C 160名以上である D 160名未満である</p> <p>今年度で学力を伸ばした2年生の生徒数が A 160名以上である B 140名以上である C 120名以上である D 120名未満である</p>	<p>【新規】 全国校外模試（7月・1月）により評価</p>	<p>進研模試7月と1月の比較 国数英3教科の全国偏差値が増加した生徒数 1年生 175名 【判定：C】 2年生 190名 【判定：A】</p>	<p>進研模試7月と1月を比較すると、国数英3教科の全国偏差値が増加した生徒数は、次のとおりであった。 1年生で175名（学年全体の平均偏差値は+0.7） 2年生で190名（学年全体の平均偏差値は+1.5）</p> <p>この調査項目は、今回新たに設定したものであり、教員全体に対して、生徒が「どれだけ伸びたか」でなく、生徒を「どれだけ伸ばせたか」を意識してもらいたい意図がある。そこから、「生徒を伸ばすためには何が必要か」を考え、個々の生徒の可能性を伸ばせるよう進路指導を計画し実践していく。</p>
	<p>1, 2年生校外模試の3教科偏差値60以上の生徒が A 30%以上である B 25%以上である C 20%以上である D 20%未満である</p> <p>3年10月記述模試で5教科偏差値が文系で56、理系で54以上の現役生徒が A 35% (120人)以上である B 29% (100人)以上である C 23% (80人)以上である D 23% (80人)未満である</p>	<p>校外模試結果の分析により評価</p>	<p>1年生10月進研模試【判定：D】 3教科SS60以上64名（19.8%） （昨年同期58名18.0%）</p> <p>2年10月進研模試【判定：C】 3教科SS60以上71名（22.4%） （昨年同期77名21.8%）</p> <p>3年10月進研模試【判定：C】 5教科文系SS56以上35名 5教科理系SS54以上46名 合計81名（23.8%） （昨年同期93名 30.1%）</p>	<p>1年は、国数英総合の平均偏差値が例年よりも低い。教科別の成績では、英語が好調で上位が例年よりも厚いものの、数学が例年よりもかなり低下している。数学を中心とした全体的なレベルアップを図る必要がある。</p> <p>2年は、国数英総合は概ね平常並みで、懸案となっていた数学は前期から回復した。しかし、理系物理の出遅れが顕著となっている。</p> <p>3年は、5教科文系が35名（昨年47名）、5教科理系が46名（昨年46名）であり、文系の数が減少した。教科別では国語は例年並みであるが、英語と数学がともに低迷している。志望別の添削指導等を丁寧に行い、学年をあげて弱点を補強する指導を行ってほしい。</p>
	<p>1, 2年生で難関大を志望する生徒が A 70名以上である B 60名以上である C 50名以上である D 50名未満である</p>	<p>進路志望調査（4月・1月）により評価</p>	<p>1月進路志望調査結果 難関大志望者数 1年生 58名 【判定：C】 （昨年同期57名） 2年生 63名 【判定：B】 （昨年同期57名）</p> <p>*昨年の2年生は9クラス編成</p>	<p>1年生は、1月進路志望調査の過去3年間では難関大志望者数が最高58名（S生39名、T生19名）であり、S生T生ともに難関大を志望している生徒が多い。</p> <p>2年生も同調査では過去3年で最高63名（S生30名、T生33名）である。しかし、2年の難関大志望者は、例年よりもT生が多いのに対して、S生がやや少なかった。</p> <p>高い進路目標を抱き、それを維持するためにも、適切な情報提供や集団づくりを行っていく必要がある。</p>

【重点目標3】多忙化改善に向けた教職員の意識改革を図り、部活動指導の効率化や校内における勤務状況の改善を推し進める。

具 体 的 取 組	主担当	達 成 度 判 断 基 準	備 考	現 状	評 価 の 観 点
① 多忙化の大きな要因となっている部活動において、限られた時間を有効に活用させることによって、生徒の勉学と部活動の両立を図る。	生徒会課	部活動加入率が A 90%以上である B 85%以上である C 80%以上である D 80%未満である  1, 2年生で「勉学と部活動の両立ができている」と思う生徒の割合が A 70%以上である B 60%以上である C 50%以上である D 50%未満である	部登録調査(4月・10月)及び生徒アンケート(7月・12月)により評価	10月部活動加入状況(昨年同期) 1年男95%(100%)女100%(100%) 2年男82%(77%)女83%(76%) 学校全体 90.5%(91.0%) 【判定:A】  学習・健康・生活アンケート(12月) 「部活動と学習の両立ができている」 1年51%(61%) 2年53%(58%) 全体52%(59%) 【判定:C】	全学年を通して、部活動加入率が高く、安定した数値となっている。部活動を退部する生徒のほとんどは、学習との両立ができないことを理由として挙げている。部活動は人間形成においても重要な役割を果たしており、今後とも加入率が大きく下がることのないように働きかけていきたい。  一方で、「勉学と部活動の両立」については「できている」との回答が前期(60%)や昨年度(59%)に比べて減少している。今年度は部活動における休養日も増えており、生徒の週間課題も精選されているという現状を考えると「学業成績の伸び悩み」が大きな要因となっているように思われる。重ねて部活動顧問に部員との面談を呼びかけ、学業の悩みを含めた相談を進めていきたい。
② 時間外勤務や会議時間の短縮化、効率化に学校が一丸となって取り組み、多忙化改善に向けた教職員の意識改革を行う。	生徒会課 総務課	「業務の効率化やタイムマネジメントに関する意識を高めた」と考える教員の割合が A 100%である B 90%以上である C 80%以上である D 80%未満である	【新規】 職員アンケート(7月・12月)により評価	職員アンケート(12月) 「業務効率の意識を高めた」88% (当てはまる32%+やや当てはまる56%) 【判定:C】	前期(87%)と比べて1%の増であった。 本校では今年度から、退校時間を20:00から19:30と変更し、管理職が職員室を施錠するなどのタイムマネジメントに取り組んでいる。現在、各種会議の精選や効率化も行っていることから、教職員の業美改善に関する意識は徐々に高まっていくものと考えている。
学校関係者評価委員会の評価	・コミュニケーション力を重点目標としたことは良い。また、教員の互見授業を行い、コメントし合うことを日常的に実施している点もとてもよい。ただ、コミュニケーション力を一つの教科の中で閉じてしまうのではなく、社会のつながりの中で捉えてほしい。大学生でも、筆記のテストはできるが、授業の中での議論が出来ない若者が多数おり、残念に思っている。 ・学年通信が親に届いていないという状況は理解できる。普通の生徒はまず見せない。その中で学校が伝えたいことをどう工夫していくかが大切。情報発信は紙媒体だけではない。学校生活の見通しをもたせるような情報発信をお願いする。特に、スマホの使い方の情報を親は知りたい。 ・最近の学生は家に持ち帰って予習・復習するという感覚が無いようだ。なぜこの勉強が必要かを自覚させないといけない。特に、高校では目の前の結果を追いがちになり、その結果を数字で求められるが、その一方で、広い意味でのキャリア教育も行っていくという二兎を追い求めるような努力をしないと良い結果はでない。				
学校関係者評価委員会の評価結果を踏まえた今後の改善方法	・生徒の進路志望について、本校では地元志向が多い。親の「近くに来てほしい」という意向が働いている。 ・生徒の伸びについても、今後とも教員全体で意識していくとともに、生徒の進路志望の達成に向けて継続的な指導を行っていく。 ・スマートフォンの扱い方(ネットトラブル)については、職員対象の調査にとどまらず、生徒の中で実際にどんなトラブルが発生しているのか、依存症の者はどれくらい存在するのか、スマホの使用回数と遅刻回数がリンクしていないかどうか、総合的に調べることを検討したい。 ・業務の効率化については、年度当初よりも落ち着いてきた印象はある。しかし、それでも1ヶ月に80時間超過の先生は数人いる。粘り強く、タイムマネジメントに関する教員の意識を高めていきたい。				

